ペン俳句会　句会報（第三七六号）

令和七年十二月四日（木）

兼題『小春日』、席題『焼』

句会を、十月と同じ場所で開催。投句八名。出席八名。（欠席は良知さん、金魚姫さん）

中村　晃也

ロト籤をコインで削る十二月
せせらぎや小さな堰となる落葉
大河ドラマ終わり秋刀魚を焼く匂ひ
舟繋ぐ鉄鎖の軋み冬隣
凍て雲の潮騒遠く近くかな
小春日や猫と一緒に背を伸ばす

松田　一文字

鯛焼や頭(かしら）を残し尻尾から
陽に透けるもみぢ真紅や空真青
はな先に柚子の近づくゆず湯かな
野狐の尾を垂れてゆく曠野（あれの）かな
縁側の猫の伸びする小春かな
汽車往ける平野に藁塚(にほ)の数多かな

宮原　凪

流れゆく一葉の一会や冬紅葉
小春日や余生のひと日句を捻り
冬初めうなじを過ぐるすきま風
冬ざれや既読の付かぬラインメール
じゃんけんの下校児ふたり冬夕焼
あっちからここへ積ん読文化の日

長尾　進一郎

水鳥の自由時間は日暮れまで
冬の道我が影伸びて先導す
長き夜や枕元に置く本の束
秋夕焼にシルエット富士西の空
小春日や行く宛ても無く街ぶらり
枕元のラジオ眠らぬ夜長かな

大津　そうかい

雪吊りを映す池の面ヘリの音
訳ありと言はれし柿の旨さかな
小春日や並べ替へたる植木鉢
激動の昭和の遥か銀杏降る
胎内はかかる気分や冬の風呂
寒空や焼け跡無惨佐賀関

安藤　晃二

幻想のやふなコキアやえのころ揺る
もみじ葉の名残の真紅渓騒ぐ
山査子の実のいろどりや秋空の
黒々と桜の古木裾紅葉
小春日やメタセコイアの天を突き
夕焼けの光塗せる藤袴

新田　ゆふき

満天星の紅葉の終の棲家かな
かざす手に洩るることなし冬日射し
ひこばえも一人前の紅葉かな
寺町や紅葉散り来る焼き団子
小春日やポケモンサンダル裏返し
バス窓に俯く人や秋深む

西川　知世

河豚の身の透くや南蛮絵皿の上
柳一樹そよげる石蕗の花あかり
強飯に師弟集へり一茶の忌
鮟鱇鍋の湯気や話のまた途切れ
不愛想な猫とベンチに冬木の芽
開き初む茶の花に来し羽音かな

次回は令和八年一月六日（火）。兼題は「正月一切」（西川知世さん出題）。席題はありません。

季語を学ぶ　初学にかえって　西川　知世

一月の兼題は「正月　一切」歳時記では正月は時候に分類されている。一年の最初の月をいっているが、最近の歳時記には一月の傍題にいれているのもあるらしい。最近は、お正月と言っても気語感が薄くなっているように思える。私の育ったころと違って、羽根つきも、独楽回しも見かけない。年始回りも、若い人から何ですか?と聞か

れることもある。しかし、現代は現代なりのお正月があり、テレビ番組は三が日中、なにかの正月を放映している。今回の兼題の一切は、どのように取るのか幅がひろい。旧来の正月の傍題…祝い月・元月・初春月・初春月などなど…現代の耳に届きにくく、実感のない傍題が並ぶ。季語として使うというよりは、一切を詠うということを逆手にとって、お正月の風景一切を詠うということにしてもよいかもしれない。メンバーの新しい視点のお正月を他の正月の季語を使って、詠んでいただければ楽しいかもしれない。例題としては、原則にそって正月の句としたいと思う。

正月の子供に成つて見たきかな　一茶

私の一番好きな正月の句である。

一酔に正月暮れし思ひかな　青木月斗
正月や宵寝の町を風のこゑ　永井荷風
正月の油を惜しむ宮の巫女　飯田蛇笏
祖母恋し正月の海帆掛船　中村草田男
正月の服着崩れし紋の位置　山口誓子
軒破れたる正月のざんざ降り　伊丹三樹彦
大き樹に大き鳥ゐてお正月　雨宮きぬよ
正月の地べたを使ふ遊びかな　茨木和生
からつぽの鳥籠がありお正月　坪内稔典
正月の風ある墓に詣でけり　岸本直毅
くろびかりして正月の柱かな　木下野生
太柱より正月の立ちにけり　小島　健
能登七輪もて正月の湯を沸かす　山下久美子
風の子の街から消えしお正月　青木敏夫